

Title	中古形容詞連用修飾の変相
Author(s)	重見, 一行
Citation	語文. 55 P.9-P.16
Issue Date	1990-11-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68818
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

中古形容詞連用修飾の変相

重 見 一 行

言語理解という点からする時、文法と意味の関係が不可分なものである事はコンピュータ言語学でも指摘されている⁽¹⁾。

この点で日本語の助動詞を独立した一単語と解し得るか否かは、微妙であると共に重大な問題である。山田孝雄氏と時枝誠記氏の対照的な理解のある事が象徴的であるが、近時提出された北原保雄氏の助動詞相互承接の順序への理解⁽²⁾も、この助動詞の一面を鋭く理論化したものと考えられる。しかし、研究者の考え出した理論と、日常的な言語生活の意識が必ずしも一致しない事、その点よりして理論を再検討する必要のある場合のある事も事実である。例えば氏が、

梅の花 散るべくなりぬ

のごとく理解されるのは、素直に同意せられると同時に、「なりぬ」なる完了した動作全体を「散るべく」と修飾限定している表現だと解しても不合理とは言えぬのではないか、「散るべくなりぬ」なる完了した動作全体を「梅の花」が補充限定していると考えても不合理とは言えぬのではないか、という率直な疑問も又生ずるのである。

実は北原氏のごとく、理論的には修飾成分の統括成分とのかかわり方を区別して考えねばならぬと思われる場合は、動詞そのものにも見出せる。本稿はその事を報告し、同時に、そこに構文的相異論を持ち込む事の困難性をも論じて、助動詞論への橋渡しにしてみたいと考えるのである。

形容詞が動詞を所謂連用修飾していると言われる場合、普通我々が想起するのは次のごとき場合であろう。

(1) 夜いたうふけて(蜻蛉326⁽⁵⁾)

(2) 風はげしくふきて(蜻蛉213 P)

(1)で言えば、「いたう」なる形容詞は「ふけ」なる動詞の動作の程度を限定していると考えられる(以下傍線と波線は各問題とする形容詞と動詞を指示する)。(2)の「はげしく」の「ふき」に対する関係も同様であろう。かかる形容詞が下接の動詞の動作のありかたそのものを直接限定するとき「修飾」はそれほど多くない。以下「直接」とは言えぬ場合を二種提出してみよう。

まず一種は次のごときである。

- (3) ほのめかし給ふけしきを心の鬼にしるく見給ひて (源氏343 P)
 (4) 人々も珍しう見たてまつりて (源氏363 P)

「給ひ、たてまつり」等の所謂補助動詞は、助動詞と共に本稿では一応考察の対象から除くのであるが、右二例は、「修飾」といふ点で異同はなさそうに思われる。しかしよく考えると相違がある。

今、この棒線部の形容詞使用の適切性を誰が判断したのかを考えてみていただきたい。(3)は、源氏の「ほのめかし給ふ」様子を六条御息所が「見給ふ」た、その動作に対する評価であるから、この場合の判断者は、この部分の発話者即記述者、すなわち作者と考えられる。かかる場合は「見」なる動作のあり方そのものを「しるく」と限定していると言え、(1)(2)と同様「直接」的修飾と考えてよいであろう。ところが(4)を考えてみると、これは「珍しいとみ奉りて」の意であるから、「珍らし」なる判断は、この部分の発話者即作者ではなく、「見たてまつる」人、すなわち葵上付の女房達である。いわば作者が、女房達の判断を代弁していることきものである。現代語では普通かかる場合、右のごとく「と」を挿入する所であろう。かく考えると、「珍らし」なる形容詞は、(3)のごとくには下接動詞を「直接」修飾したものとはい難い。「見たてまつる」動作の対象たる源氏への評価であり、源氏を「珍らし」と感じるあり方で、「見」る、のごとく、いわば「間接」に「見」なる動詞を修飾しているのである。

かかる「直接」か「間接」かを判定する目安として、森重敏氏の

「逆述語」なる理解の仕方⁽⁶⁾を導入するのが有用である。氏の用語は、「美しき花」は「花美し」の逆述語表現とされるごとく、連体修飾の關係で用いられているが、これを連用修飾に転用してみようとするのである。例えば次のごとく(以下すべて必要部分のみを現代語訳で示す。また以下「形容詞を述語化する」とはかかる作業を指す)。

- (3) 見る事(あり方) がはっきりだ
 (4) 見る事(あり方) が珍しい
 (3) の「見る」と「はっきりだ」の意味關係(以下「意味關係」とは問題とする形容詞と動詞のそれを指す)は、もとの(3)のそれと変わらぬと思われるが、(4)の場合は異なる解釈を生じるであろう。例えば「見るやり方が珍しい」とか「見る動作をする事が珍しい」のごとくである。もし原意味關係に合致せんとするならば、
 (4) 見る対象即源氏(のあり方) が珍しい
 のごとく言わねばならぬであろう。「直接」「間接」判断の目安となし得ると考える所以である。

右のごとき「間接」修飾は「思ふ・聞く」等の動詞にも見出せる。

- (5) 人々に似じと深くおぼせば (源氏319 P)
 (6) 何のはえなきをぞ口をしようおぼす (源氏256 P)

この場合も形容詞を述語化して、

- (5) 思う事(あり方) が深い
 (6) 思う事(あり方) が残念だ

としてみると、(5)の意味關係は(5)の原意に変わらぬと思われるが、(6)の方は、この表現からは「相手が(心に)思っているのが残念だ」のごとき(6)の原意と異なる意味しか想起し得ぬであろう。これ

も(6)と同じ修飾内容にするとすれば、

(6) 思う対象||末摘花(のあり方)が残念だ

と言わなければならぬであろう。その他、かかる「間接」修飾は

「おほゆ・聞ゆ」等のごとき所動詞的⁽⁷⁾動詞にも見出せる。

(7) いかでか⁽⁷⁾と深くおほゆ(源氏203P)

(8) 道遠くおほゆ(源氏159P)

これも形容詞を述語化して、

(7) 思われる事(あり方)が深い

(8) 思われる事(あり方)が遠い

としてみると、(7)の方の意味関係は(7)の原意に変わらぬと思われるが、(8)の方はいかなる意味か理解に苦しむ事になる。

(8) 思われる対象||道(のあり方)が遠い

のごとく言わねば、原意に合致せざる事が判明するのである。

以上のごとき「間接」修飾を仮りに「甲型」と命名してみると、この甲型間接修飾は、「修飾」とは言っても、動詞のあり方そのものを直接限定しないという点で、動詞に助動詞の下接したる場合、形容詞と助動詞の間で、それぞれの種類の係り受け(修飾)の制約と言った構文論の問題は生じない、と言った理論も成立し得る点に留意していただきたいのである。

二—二

次にもう一種の間接修飾について考えてみよう。それは他動詞的動詞の場合に特に明確になし得る事である。つまり他動詞的動詞の場合、「他を動かす」と「他が動く」との二つの動作に分解して理解できるが、特にそれが対応的な語彙を有する場合上接の形容

詞はいずれの動作の評価であるかという問題である。

まず先に、自動、他動いずれも「直接」修飾と考えられる例を提出しておこう。

(9) いみじう⁽⁹⁾時めき給ふ(栄花132P)

(10) さまあしく⁽¹⁰⁾時めかしきこえ給ふ(栄花92P)

(9)は東宮妃城子の自動的動作としての表現であり、形容詞はその動作の「直接」修飾と思われるから、形容詞を述語化して

(9) 時めく事(あり方)がたいそうだ

としても、原意に変わらぬと考えられる。

(10)も、栄花物語作者の、女御姫子をむやみに「時めかす」花山院に対する批判であるから、かかる他動的動作のままて形容詞を述語化しても原意に変わらぬと考えられる。

(10) 時めかす事(あり方)が見苦しい

のごとくである。ところが次の場合は同じではない。

(11) いたうやつれ給へれど(源氏178P)

(12) いたくやつし給へり(源氏139P)

(11)の「いたう」が「やつる」なる自動的動作の程度を評価する「直接」的修飾である事は異論ないであろう。その「いたう」と同じ評価対象を有するのが(12)の「いたく」であると考えると(文脈的にそうとしか考えられぬが)、この場合は「やつす」なる他動的動作そのものへの直接修飾とは言えなくなる。つまり「ひどく目立たないようになるようにする」のごとき意味関係として理解しなければならぬであろう。その事は形容詞を述語化してみれば判明する。

(11) 目立たないようになる事(あり方)がひどい

(12) 目立たないようにする事(あり方)がひどい

(12)は、「目立たぬようになるようひどく努力する」とか「目立たぬようになるようひどく力を加える」と言った別の意味関係に解釈される可能性が生じていると言えよう。勿論、必ずしも筆者の理解には賛成し得ず、(12) (12)のままでも、「いたく」は(11)と同じ対象の評価のごとく解し得ると考える人もあるであろう。しかしその場合も、結局「ひどくめだたぬようになるようにする」のごとく、「やつる」なる、表現面に直接現れざる自動的動作を「読み込ん」でいる事になりはしないであろうか。「読み込む」なる理解の当否はともかく、それに似た作業を無意識に行っている事に相違あるまいと思われる。いずれにしても、(12)の「いたく」は「やつる」なる動詞を「直接」にはなく「間接」に修飾していると考える所以である。

(13) 似たてまつり給ひて(源氏395P)

(14) いみじくよく似せてよむに(枕218P)

(14)の「よく」が(13)の「よう」と同様の「似」なる自動的動作のあり方を評価したものであるとするならば、「似せ」なる他動詞的動詞を「直接」修飾しているとは言えぬ。この点も形容詞を述語化してみれば判定しやすい。

(13) 似る事(あり方)がたいそくだ

(14) 似せる事(あり方)がたいそくだ

(14)の場合は、必ずしも(13)のごとき意味関係とは理解できず、「似るようになる程度が高い」とか「似るようになる手段が上手だ」と言った意味に解されるであろう。勿論この場合も(14) (14)のままでも、形容詞と動詞の意味関係を(13)と同様に解し得ると考える人もあ

るであろう。しかしその場合もやはり、「よく似るようになる」のごとく、表現面に直接現れざる「似る」なる自動的動作を無意識に「読み込ん」でいるのではあるまいか。「よく」は「似す」に対して「間接」の修飾関係にあると考える所以である。

右のごとき「間接」修飾を仮りに「乙型」と命名してみると、乙型間接修飾も、下接の動詞そのものを直接修飾限定したものならざる点において、動詞に助動詞の下接したる場合、形容詞と助動詞の種類における制約問題はあり得ぬとする見解も生じ得る点に留意していただきたいのである。

三一

さて、しかし一方では、かかる二種の間接修飾をそのまま構文論の根拠とするには問題があるとも考えられるのである。その点を、それぞれについて、理論的問題点と中古人の意識の点から指摘してみよう。

まず甲型の場合であるが、理論的問題点から指摘してみると、一点は、かかる「直」・「間」の別がすべての場合に明確に判定し得るとは言い難い点である。

(15) 人の心をいみじうおぼす(源氏116P)

(16) かへらせ給ふをいみじう思しめす(源氏376P)

(17) 兼資の主の女をいみじうおぼいたりしを(栄花187P)

「思す内容」の必要と思われる程度で排列してみた。すなわち「内容」を必要とするものは、「いみじう」がその内容を限定する、つまり「おぼす」なる動詞に対しては「間接」的修飾になると考えられるのである。その点では(15)が最も「間接」的であり、(17)が最も

「直接」的であると思われる。しかし次のごとき問題もある。すなわち、(16)は岩波古典大系で「悲しさ」いみじう思しめす」と注しているが、「悲しさは」と解すれば「間接」になるに對して、「悲しさを」と解すれば「直接」になる。方々、直・間の判定はやさしくない例である。

第二に、かかる甲型間接修飾の理解は、「見る・思ふ・聞く」のごとき動詞のみならず、別種の動詞の場合にもなし得る点である。

(18)いとよく造りたてて(栄花188P)

(19)新しう造り給へる殿(源氏311P)

これ等の形容詞を述語化してみると、

(18)造りたてる事(あり方)がよい

(19)造る事(あり方)が新しい

(18)の意味関係は一応原意に変わらぬと見られるが、(19)の場合は「造る工法が新しい」と言った意味に解されてしまう恐れがある。

誤解をなくすためには、

(19)造る対象Ⅱ殿(のあり方)が新しい

としなければならぬであろう。つまり(19)は直接修飾とは言いにくい関係なのである。

(20)ちかう呼び寄せたてまつり給へるに(源氏20P)

(21)くはしく奏し給へば(源氏200P)

これ等も形容詞を述語化してみると、

(20)呼び寄せる事(あり方)が近い

(21)奏す事(あり方)がくわしい

(20)は動作そのものが「近い」というのであれば意味不明になる」とく

(20)よび寄せる対象Ⅱ紫上(のあり方)が近い

とする方が正当だと考えられるのである。つまり、この場合も真に「直接」とは言い難いのである。(21)はこのままでも形容詞と動詞の意味関係は変わらぬと思われるが、

(21)奏す事柄(のあり方)がくわしい

の意味とも考えられる。かく検してみると、真に「直接」修飾と言える場合は少ないのであり、従つてまた、それを甲型間接修飾の問題として検討せんとすれば、その境界は茫洋としたものなる恐れがあるのである。

次に、中古人の言語意識という点で考えてみる。筆者は別稿(注(3))において、否定助動詞と連用修飾形容詞とのかわりについで、修飾範囲の否定助動詞に及ばざる場合は、

(22)くはしくかかず(落窪161P)

のごとき例は少なく、

(23)いとくちをしうはあらじ(枕200P)

のごとく、「は・も」の介入した場合が多いとして、それは中古人における構文意識が普通には、

(22)くはしくかかず(ず)

のごとくではなく、

(23)くちをしう(あらじ)

のごとくであったからと考えたのであるが、この点で甲型間接修飾の場合を検してみると、例えば源氏物語岩波大系第一冊中の「思ふ・見る・聞く」(所動詞・複合動詞的なものを含む)では、間接修飾では「は・も」の挿入あるものが7例、なきものが2例、直接修飾では挿入あるものが4例、なきものが2例、否定助動詞下接の

例として見出せる。次のごとく（前2例間接、後2例直接）、

(24) 浅くは思う、給へざらん（源氏96 P）

(25) 所狭く思う、給へぬにだに（源氏63 P）

(26) 深くも思し入れたらぬ（源氏398 P）

(27) え深く思ひよらねば（源氏360 P）

直・間共に「は・も」の挿入が多く、挿入なきが少ないと言うのは、挿入が直・間の相異によるものではなく、否定表現の故であると推定される。この点よりすれば、中古人において、かかる甲型の直・間の構文区別は自覚されていなかったと考えられるのである。

更に同じ形容詞が直接にも間接にも使用された例の多い点が指摘できる。

(28) わりなう おほしみだれぬべし（枕62 P）

(29) わりなく 思ほしながら（源氏31 P）

(30) 様かへてをかしう 思ひつづけて（源氏242 P）

(31) すずるにをかしう おぼゆ（枕112 P）

(28)(30)が直接、(29)(31)が間接修飾の例と思われる。形容詞の意味的性格がかかる直・間問題と関係を有せざるを見出すと同時に、そういう区別意識が当時の人々になかった事をうかがわせるものでもあろう。

三—2

次に乙型間接修飾の問題点について考えてみよう。まず理論的な点を二点指摘する。

第一は形容詞が他動的動作全体の評価なるか否か、すなわち「直接」なるか「間接」なるか明確ならざる場合のある点である。

(32) 弓弦いとつきつきしく、打ち鳴らして（源氏148 P）

(33) とくきこしめさせばや（枕193 P）

(32)は「(弓弦を) 打ち鳴らす事(あり方) が似合わしい」と言うのか、「(弓弦の) 打ち鳴る事(あり方) が似合わしい」と言うのか。

前者であれば他動的動作そのものの「直接」評価であり、その場合の「似合わし」さは主として視覚的な判断であると想定される。後者であれば「間接」評価であり、主として聴覚的判断による評価が想定される。原典での文脈からすれば後者と考えられるが、この部分のみでは限定し難い。(33)の他動性を示す「せ」は普通には助動詞と解されていると考えられるが、そう考えると助動詞問題への連続性を有する例でもある。これも「きこしめさせ」なる他動的動作を「とく」したいと言うのか、「きこしめす」なる相手の自動的動作が「とく」あるようにしたいと言うのか。前者であれば「直接」評価であり、後者であれば「間接」評価という事になる。この部分は文脈的にも判定が困難である。

第二に、この乙型の問題は、必ずしも他動詞的動詞に対する自動詞的動詞の語彙の整備されたる場合に限らず、整備されざる場合にも拡大して考え得るという点が問題である。

(34) 御琴をいとをかしう 弾き給へば（栄花49 P）

「弾く」に対して「鳴る」動作は当然発生し得る。先の(32)の「鳴らす」に対して「鳴る」のごとくである。そうすると、この場合の「をかしう」なる評価が、発話者||作者の意識において、「弾く」なる他動的動作そのものあり方を限定した表現であったか否か疑問が生ずる。すなわち、「琴を趣深く弾く」という、主として視覚による評価の想定される場合ではなく、「琴が趣深く鳴るように弾

く」という、主として聴覚による評価の想定される場合ではないかという疑問である。一般的なこの種の場面表現からして、むしろ後者の可能性が高いと考えられる。つまり間接修飾の關係表現である可能性が高いのである。しかし、この部分を記述する時、作者は、「琴が趣深く鳴るように弾く」のごとく、「鳴る」なる表現面に全く現れざる自動的動作を、「読み込む」作業をしたと言えるか否か、はなはだ疑問でもある。

この点で中古人の意識のあり様を知る一つの例を提出してみよう。

(35) 御文などはしげうかよへど(枕159P)

(36) (文を)しげうかよはず(蜻蛉11P)

消息を「かよはず」場合は四段活用と考えられるが、この「かよふ」と「かよはず」は、前者は「手紙が行き来する」の意で、後者は「手紙を行き来させる」の意として、自動他動の区別意識はあったと思われる。従って、(36)の「しげう」も(35)のそれと同様、「手紙が行き来」する自動的動作の評価を表すものとすれば、(36)は「手紙が頻繁に行き来するようにさせる」の意で、乙型間接修飾の場合と考えねばならぬ。ところがこれを原典の文脈中にとみると、少し別の理解をしなければならぬごとく思われる。すなわち、ここは兼家の処遇を不満に思う作者が、彼の手紙に返事を書かぬために、心配した母親が代筆で返事すると、兼家はそれとも知らず「まめやかにうちよろこびて」手紙を「しげうかよはず」というのである。従ってこの場合の「しげう」には兼家に対する嘲笑的評価の気味がある。換言すれば、「かよはず」なる兼家の他動的動作そのものへの嘲笑的評価の気味があるのである。そのような点を重視すれば、この部分の記述者「作者の構文意識は「直接」的修飾關係意識だったと考

えざるを得ぬのである。筆者は最初当時の「かよふ」と「かよはず」に、自他区別の意識の希薄性を想定したが、そうではないと思われる。これを既論のごとく、無意識の自動的動作の「読み込み」と解すべきか否かは別として、少なくとも意識的な構文感覚は「直接」的なものであったと考えられるのである。

この事は次のごとき例でも証拠立てられると思われる。

(37) かぢたかうもせさせ給はず(宇津三340P)

これは、加持をさせるに当たって、声を高くあげさせない、という意味であるが、従って「たかう」は「加持する」自動的動作の評価であって、「加持せさせ」なる他動的動作そのものの評価ならざる事は明白である。しかしこの「も」の挿入は、

(37) (たかう)もせさせ給はず

なる構文意識である事を示していると思われる。この場合、他動性を表示する「させ」は普通助動詞と考えられている事を考えると、論理的には明らかに「たかう」は「せ」のみを修飾していると考えられるにもかかわらず、助動詞「給は」も「ず」も含めた、所謂文節全体への形容詞の照応という構文意識なる事は、他の助動詞下接の場合の当時の日常的言語生活者の構文意識を知る手掛かりにもなろうと思われるのである。

注

(1) R・グリツシユマン(計算言語学)(山梨・田村訳)等。

(2) 日本語助動詞の研究。

(3) 拙稿「ひさし」の構文論」比治山女子短大紀要22。

(4) 注②41P

(5) 以下岩波(日本古典文学大系)本による。ただし源氏物語は第一冊・栄花物語

語は上巻のみ。

(6) (日本文法通論) 106 P

(7) 三上章 (現代語法序説) 104 P

(8) 次のことき根拠をあげうる。③源氏物語等「かよはず」にのみ「給ふ」なる尊敬補助動詞が下接して、人の行為なる事を指示している。④「かよふ」の方には「御文のかよはぬをりなし」(源氏三20 P)のごとく、「御文」の主語になつた例が見える。

—富山大学教授—